

# やぶれ傘



一一三三号  
二〇二〇年四月

土佐水木土管をぬらしあがる雨	根橋宏次
啓蛩の砂場に砂の山ひとつ	大島英昭
花壇よりはみ出してゐる犬ふぐり	きくちきみえ
鳥帰る山近ければ雲低く	廣瀬雅男
手にコーヒーパーステルカラーの春コート	青谷小枝
畑中にぼつと外灯梨の花	藤井美晴
杉菜生ふ鶏肉店の裏の道	瀬島酒望
裏返る織の文字を読む梅見	井久保 熱
丸見えのスポーツジムや猫柳	渡邊孝彦
囀りの一樹となりの一樹にも	安藤久美子
春の夜半おくび出さうとしてゐるが	小山よる
春嵐赤城山から土ほこり	白石正躬
綿菓子に子は口寄せて花の茶屋	天野美登里
早蕨を小箱に小銭入れて買ふ	秋山信行
初蝶の通りを渡りきるあいだ	有賀昌子

## 抄 集 句 傘 紀 大 崎 夫 選

野天風呂ほころぶ花を眺めつつ	松村光典
雪を掻く見知らぬ人に会釈して	萩原久代
辛夷散る信号待ちの足元へ	橋本美代
気がつけば土筆探しの日となりて	武藤節子
手で計る川の水温春めきて	村田 武
出て見よと夫の知らせる冬満月	山本久枝
ガラス戸の日当たるところ冬の蠅	石原健二
リフトの足ふれんばかりに鼓草	稲田延子
紙コップの白湯の温もり春の昼	神山市実
踏み入りて節分草とたしかむる	倉澤節子
水湿むオイル捌きの軽やかに	齋藤朋子
白梅をほんやり眺め日曜日	坂本和穂
たしかめに何度も外に春の雪	藤崎志津子
蒲公英のところまで止る車椅子	中島和子
車窓より雪の山並み送電線	貫井照子

松明けの浅草神谷バーに飲む  
裸木の三又に月沈みゆく  
真顔して一合榊の福は内  
落椿壊れししままの長屋門  
朧夜の交番の灯は煌煌と  
上がるのも上がるぬ風日和  
送電線に碍子いくつか山笑ふ

萩原溪人

萩原久代

賀状には十七文字の佳句があり  
雪を掻く見知らぬ人に会釈して  
雪道はペンギン歩きせよと云ふ  
乗り換へて降り立つ町は雪しまき  
辞書捲りエア・メール読む春隣  
産土の天神様の梅まつり  
ほらほらと片手に余る露の臺

五時八分終の友逝く寒の朝  
豆撒きの鬼はスマホVサイン  
来し方をたどる二月の誕生日  
ペランダに満開となる鉢の梅  
辛夷散る信号待ちの足元へ  
鉢の木瓜色とりどりに咲きにけり  
花訪ね息子夫婦と八千歩

橋本美代

濱野新

春めくや幹から枝へ栗鼠の影  
鶯の初音思はず振り返へる  
沈丁の匂ひに深く息を吸ふ  
せせらぎの音ちよろちよると風光る  
父と子のキャッチボールや春の風  
逆上がり上手く出来た子春うらら  
公園の花手入れする人や春

広瀬 濟

天井まで積まれし古書や冬深し  
落葉踏む靴底の音やはらかし  
納豆に添へる朝餉のきざみ葱  
春風やけんかのやうな茨城弁  
参道の下駄屋の軒に雀の巢  
担ぎ上げし艇の雫や水温む  
梅見して小振りの皿を二枚買ひ

本郷美代子

冬晴れや番の鳩の毛繕ひ  
御神木より尾長飛び立つ二月  
春浅し何時取れるのか夫の杖  
切株の楮に梅の花咲いて  
荒東風を厭はず子らはボール蹴る  
春塵にまみれながらも子ら走る  
玉椿まだ硬くしてゆるまざる

本田 武

朝日浴び水面翔びたつ小白鳥  
再植樹の花はいつぼし梅まつり  
無住寺の縁に小仏春近し  
武蔵野の病棟叩く春一番  
永き日のナースと交はす二三言  
霾るや休校続く学び舎に  
八丁路にて初孫抱く初桜

増田裕司

前菜の初胡葱の色やよし  
居眠りに揺れる小春の山手線  
牛鍋の匂ひ染みたる部屋に入る  
江知勝の終の宴に集ふ冬  
早梅や送迎パスを待つ園児  
水仙の一本すくくと残り立つ  
囀りの早き夜明けや昨日今日

マンションのベランダの隅干大根  
駆足で初荷届ける宅配人  
ネクタイに神姿豆を撒く  
初恵比寿合格祈願の絵馬に誤字  
春雪のなかか葬列は山寺へ  
河豚屋から法事客らの赤ら顔  
「五パーセント還元のお店」桜餅

松本善一

蕎麦湯飲みほつと一息深大寺  
病室の窓の向うの寒夕焼  
マスクして拝む人あり深大寺  
紅梅に別れを告げて庭を去る  
夕暮の辛夷花咲く寺の庭  
微風に揺れてゐるなり雪柳  
絶食後のお粥の旨さうらけし

箕田健夫

寒鴉いきなり母音はつきりと  
寒萌に土管ごろりと降ろさるる  
寒雀吹かれましたいでに翔ちにけり  
マスクしてマスクの人を訝しむ  
着ぶくれて風につまづきさうになる  
気がつけば土筆探しの日となりて  
春雨に土の匂ひの混じりけり

武藤節子

手で計る川の水温春めきて  
夜の明けの田んぼに光る薄氷  
如月の満月出づる日暮かな  
土煙り立てて過ぎたる春疾風  
ケンケンと雉の声聞くる川原道  
花万朶池の真中の魚跳ねる  
菜の花の芥子和中の魚跳ねる

村田武

枯芝に木立の影のくつきりと  
 初雪は夜来の雨にあはく消え  
 春近し検診終へてケーキ買ふ  
 銀杏の枯る広場の先に絵画館  
 駅前バスを待つ列冴返る  
 料峭の朝ベランダに鳥のゐて  
 通学路に学童見え木瓜の花

森美佐子

山本久枝

出て見よと夫の知らせる冬満月  
 水仙の土もたげゐるひとところ  
 スカーフを軽く結びて春の旅  
 梅林は土手を背にする日当りに  
 春耕の畑の潤ひ黒々と  
 白木蓮日暮とどめてゐたりけり  
 青空にこゑの消えゆく揚雲雀

湯本正友

淑気満つ弓張提灯ともる杜  
 昼下がりが猫大寒の庭過る  
 鼠と猫が揃ひてすはる賀状の絵  
 パキパキと薄氷つぶし児が通る  
 霜の午後日向に靴の跡続く  
 花びらは梅の花びらに  
 朝採れの畑の菜花を汁の具に

湯本実

初富士の姿一瞬車窓より  
 霽降る狸穴坂を早足で  
 節分や面を作りて鬼の役  
 昼飯を食ひ損ねけり春炬燵  
 春早しニツカボツカがパタパタと  
 資料館となりし豪邸木瓜の花  
 新聞手にソフアーに向かふ目借時

吉田幸恵

冬夕焼盛土の上のシヨベルカー  
茶が咲けり訪ぬる家はこのあたり  
絵馬の上に絵馬むすびぬる受験生  
初雪はまことふはり消えにけり  
十本のアネモネを挿す喫茶店  
鐘おぼろ神木に頬押しあてて  
蜷汁かたことと濁りゆく

浅嶋肇

校庭のフェンスに穴や犬ふぐり  
卓上に中折れ帽子マフラート  
朧夜の回るともなき観覧車  
ひもすがら土鳩来てぬる春隣  
終業を告げる鐘の音春めいて  
早春の散歩靴紐締め直して  
陶器市春一番が吹き抜ける

安齋正蔵

白米に露味噌のせてもぐもぐと  
初音きく山のコンビニ店の前  
沖暮れて海苔かく人の影の減り  
ほうれん草小鍋で茹でて老いてゐる  
彼岸入り古里離れ五十年  
北窓を開きしとき頬に風  
雛壇の前で耳打ちする双子

石塚清文

敷き藁に夕日差しぬる寒牡丹  
母娘して絵馬結びぬる雪催  
バス停にひとり降り立ち寒の月  
紙の面紙の豆にて鬼は外  
牧駆ける馬のたてがみ春疾風  
曇る日の野焼きの煙土越えて  
枝垂れ梅隠れるやうに小料理屋